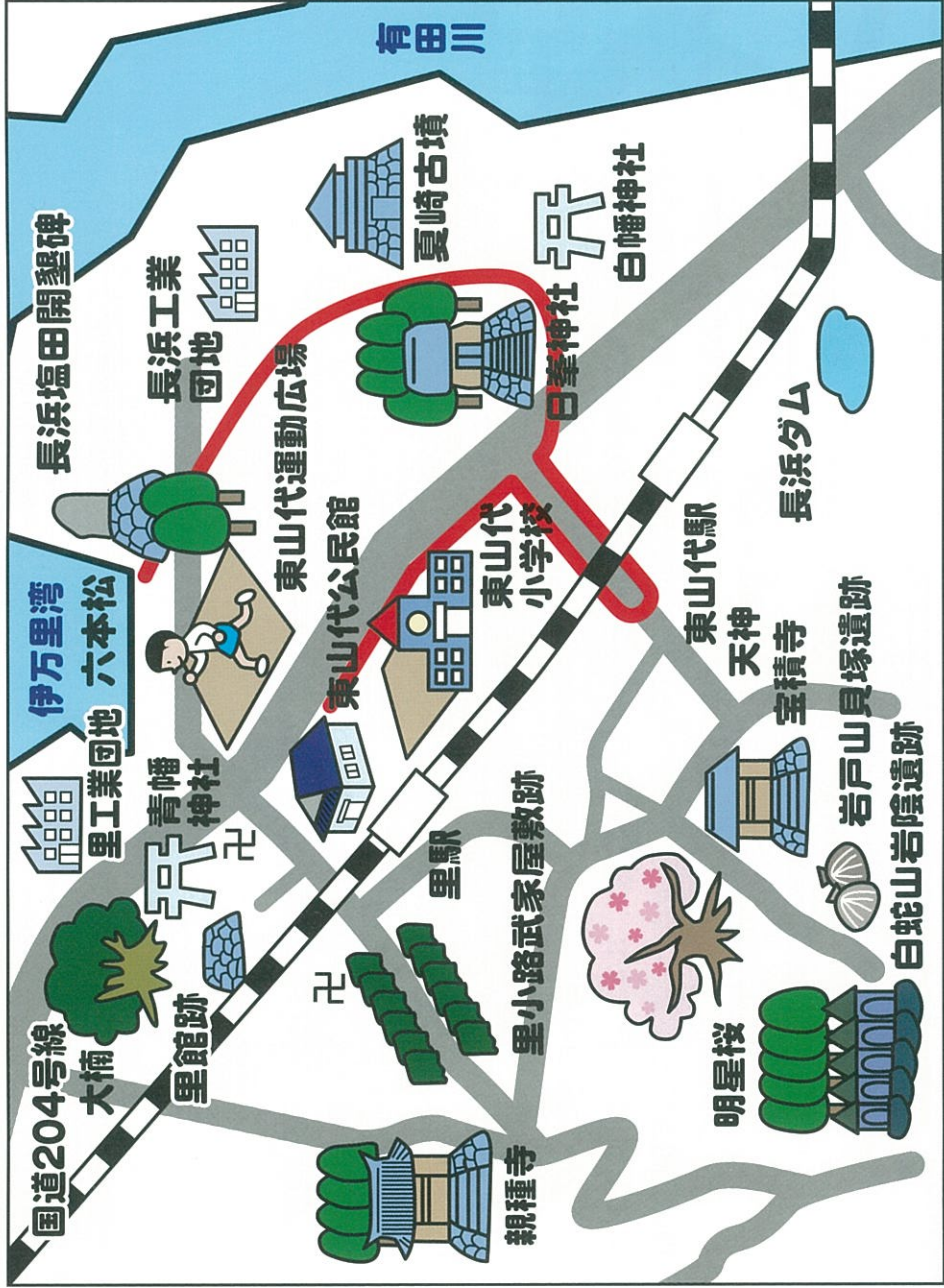


東山代公民館 ⇒ 天神 ⇒ 志賀神社(日峯神社) ⇒ 六本松
道のり4.2km



天神



シ 干潮ノ際ハ徒渉シテ 以テ参拜セシト伝ウ
脇野ヨリ分離シタルモノナリト云ウ 按ズルニ
ノ年月明力ナラズト雖 凡ソ二百年ヲ経タルナラシカ

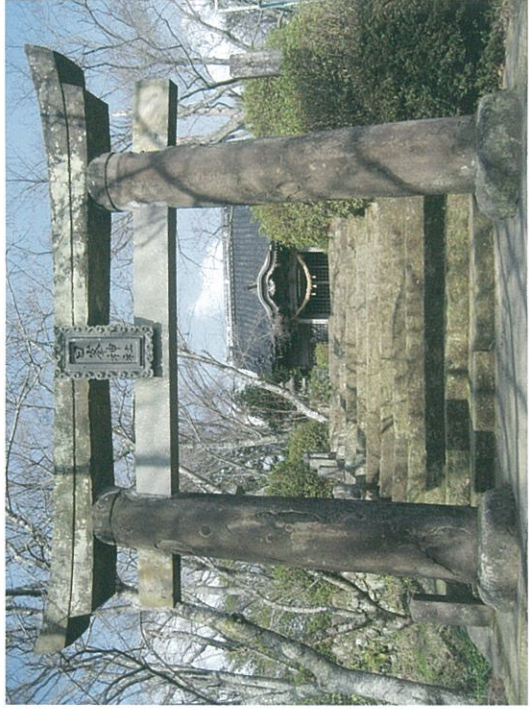
言葉の意味
孤島=海上遠く離れてある島 領分=その村のうち 奉祀=祀ること
徒渉=徒歩で川を渡る 埋築=埋め立てて築く 按ズル=考える

大むかし、海岸線は、脇野、浦川内付近にあつて、現在、水田が広がる一帯は、潮の満ち引く海でした。今の天神、長浜の麓嶋は、海に浮かぶ小島で、その北方に長浜の丘陵地が海に延びていたという情景が想像できます。

東山代村誌に、次のような記録が残されています。

「此ノ地ハ二百年前マデハ 一小島ニシテ 脇野ノ領分ナリシカバ 此ノ島ニ天満宮ヲ奉祀 前瀬 後瀬ノ埋築ト共ニ 一小部落ヲ形成シ 後瀬ノ埋築ハ宝暦八年ニシテ 前瀬ノ埋築ハ貞和二年ニシテ

志賀神社(日峯神社)



石段づくりの参道を上ると、その途中、右側に「新堀耕地整理記念碑」という表題の石碑が立っています。その碑文(石碑にほられた文)から、長浜における製塩(塩づくり)の歴史を知ることができます。

江戸時代佐賀藩には塩田がなく、食塩が不足がちでした。このことを心配した初代藩主鍋島直茂は、慶長13(1608)年成富兵庫茂安に塩田の造成(つくりあげること)を、山代郷奥浦の住人中尾六右衛門に製塩を始めよう命じました。

また、黒田藩主黒田長政にお願いして、筑前姪浜から武藤九郎兵衛や志田孫兵衛などの製塩技術者を招きました。慶長19(1614)年には、奥浦、中土井、浜田、立部、勝田に塩田が完成し、製塩が始まりましたが、筑前姪浜から製塩業の守護神(まもりかみ)とされた住吉大明神の分霊(かみれい)の神(神の霊を分けて他の神社で祀ること)を勧請(かみれい)し、神(神の霊を分けて他の神社で祀ること)を勧請(かみれい)して、麓嶋に志賀神社を建て、製塩の安定を祈りました。(一説には、筑前志賀の島から分請したとも伝えられています)その後、明治40(1907)年に、藩祖直茂公の霊を合祀(あひまつ)する社に祀ることとし、「日峯神社」と尊称するようになりました。

天保6(1835)年の古地図によると、浜田、新浜、田土井尾瀬、天神の北部が塩田となっており、安政2(1855)年の古地図には、新浜、新瀬、本日尾瀬が塩田となっています。塩田は奥浦から始まり、南から北へ開拓が進められました。そして、古い塩田はその都度、水田になっていったようです。なお、むかし堤防であった所に、今も龍神宮が祀られているところがあります。

六本松



「鍋島直茂公塩田開墾之祖」と刻まれた石碑に「弘化5年竣工」とあります。長浜新瀬はこの年(弘化5((嘉永元))1848年)に完成しました。人々はここに龍神宮をまつり、堤防の安全と製塩の発展を祈りました。

明治43(1910)年の塩田整理の令により、製塩は中止となり、約300年にわたって鍋島藩の食塩をまかなくなってきた長浜塩田も廃止となりました。

以後、塩田は水田として整地されていきましたが、脇野川の下流一帯は、低湿な地帯で排水が困難な所でした。何回か排水工事が行われ、昭38(1963)年に水門が完成し、現在のような地景(土地の様子)ができてきました。